

## フランス・キュルテュール 「精神分析のはなし」第4話

インタビュアー： それは普通ですか？

JAM： 精神分析はモノローグです。ただしそれは精神分析家が解釈をすることを除いて、 です。解釈は、ひとつの語です。解釈は物事を明らかにはしません。というのは分析家は 言いあらわしませんし、説明しません。分析家はただ言う、のです。「解釈」と呼ばれる もの、それは、分析家が言うことです。そして、それによってこそ、解釈は作用します。 寝椅子に横たわる彼、彼女にたいして、どんなことでも言うようにと励ましながら、分析 家が作り出す非常に特別な文脈において。そうです、ひとが解釈と呼ぶものは、パロール の特殊なひとつの様式であり、変な bizarre 様式です。

変な？あなたは変な、と、言いましたか？変なという語自体が、変です。変、は、変、で、 よくある使い方では、ひとが遠ざかるとき、「それは変だ」と言われます。「あるだれか が変だ」と言うとき、それはそのひとの振る舞いが普通ではない場合です。それが辞書の 定義です。辞書はそのために存在します。それは普通、ことば（ラング）のある状態の なかで受け取られた語の通常の使い方を保証するために存在します。 よろしい。私にとって、変という語は、精神分析のなかに完全にその場をもっていると思われます。

もしひとがロベール辞書のなかで反義語、反対語を探すなら、なにが見つかるでしょうか。変の反対は、明快だ (claire)、同等だ (égal)、均衡のとれた (équilibré)、普通 である (normal)、ありふれた (ordinaire)、 均衡のとれた (pondéré)、 規則正しい (réglé)、等々です。 よろしい。認めなければならないのは、分析的な解釈というのは明快 ではなく、均衡がとれてもなく、シンプルでもなく、ありふれたものでもありません。それらとは反対で、喜んで認めたのは、解釈は不透明なもので、行き過ぎていて、複雑で す。そしてむしろ、普通からはずれています。少なくとも、それらはパロールの言表文で す。ことばの綾というものです。それは普通から飛び出しています。

フロイトがその奇妙な実践を創りだしたもとになった現象は、ずば抜けて、変な現象で した。それは不規則的な、不透明な現象でした。無意識は根本的に変なしかたで現れると

さえ、言うことができます。ひとは分析に来るとき、分析に来ると、ひとは自分がある種、変な現象の台座であると感じます。いくらかのつまづき、変な不能、変な強迫、そして、とりわけ変な症状が存在します。じっさいに、変なことが存在していて、そのひと全体にそれは広がっているものです。たとえば、あるだれかが階段をあがるままにしてよいのか、管理人が知ろうと調べるという症例さえも存在します。もちろんそれはもっともよくあるケースというわけではありませんが、あることはあります。もちろん、あまりにも変な患者たちは、多くの場合精神科病院に連れて行かれたり、自ら行きます。変、というのがある一定の程度を越えた場合はそうです。まあ、それは、その環境の寛容さによって決まるでしょう。

そして最後に、本当のことを言うと、すべてのひとにとりもどしも変なものとは、ーその実践や職業においてーそれらの患者よりさらにいっそう変なもの、それは、精神分析家自身です。よろしい。ひとはそれに慣れています。むしろひとはその変な人格に慣れたというべきでしょうか。あなたはその風景の一部です。まあ精神分析が1世紀たったところ、そこに私たちは今いるわけですが。分析はもうそれほど変なものとは映りません。しかし、まさにそのことがあなたを困難にさらします。精神分析がもうそれほど変なものとは映らないことが、困難にしているのです。幸いにも、少し前から、精神分析がふたたび変なものであると映りはじめるなら、それはひとつのチャンスであると、私は言いましょう。そしておそらくそのおかげで私はラジオで話すことになったのでしょうか。というのは、私は精神分析を実践して、もう四半世紀になります。わたしはいつかこんなふうにラジオという手段でもってあなたにお話しするとは、夢にも思っていませんでした。この手段をもつひとが私に提案するとは、思わなかったのです。それはたぶん、ここ最近で少し精神分析のまわりで騒動が起きているからでしょう。精神分析のまわりで、心理療法のまわりで起きていることです。ひとはあら探しがしたかったのでしょう。それで最終的にわたしはここにいまいるわけで、まあ、きっとこれはひとつのチャンスなのでしょう。

あまりに変だと映らないよう、精神分析家たちは出来る限りのこととしたのだと、言わないとなりません。分析家たちが他の人とおなじような市民であると示すために、です。堅実な人たち、よきブルジョワとかです。それはあまりに成功してしまったのだと、言わなければならないでしょう。しかしそれでもやはり、わたしたちはそれら外観を気にしているわけではありません。その側面において、分析家が仕事をしているのではないということを、ひとはよく知っています。それはこの規則的な意味においてではないのだと、知

っているでしょう。

ラカンをごらんなさい。ラカンはラカンにかんするたくさんの逸話があり、それらはすべて本当です。間違っているものすら、本当です。そしてそれらの逸話すべてが表しているのは、ラカンが完全に逸脱していること、極めて変であることです。よろしい、この想定された異様 *bizarrie* というのは、まったくもって損なわれていません。精神分析とは反対に、信心深い魂がそう思うかもしれないのとは反対に、そうなのです。20世紀の後半ラカンによって受肉したこの異様というものは、精神分析を新鮮なものにし、若返らせました。ラカンは精神分析に新しい飛躍のようなものをもたらしました。その飛躍がいまなお私たちに関わっていますように。そしてそれが精神分析に反対する人たちにすら、関わっていますように。

ですから、変な感触、というものは、そうです、精神分析家の印（マーク）です。それは本当にずるがしこい精神分析家が、全然変なところはないのに、変なものに影響を与えるほどです。たとえばふたつの戦争のあいだ、ちょっとしたアクセントは、[略] 害するどころかむしろ精神分析の威光に仕えていました。ある期間、それはむしろとても強制されたものでした。なぜなら、もちろん、精神分析家たちを連れ去らなければならなかつたからです。そのうえ、最初は、彼らは中央ヨーロッパに連れ去られたのですが、まあいいでしょう。精神分析家を描くアメリカのすべて映画では、精神分析家たちはみな、というか、多くの場合、ちょっとしたアクセントをもつ者として描かれています。こんなふうに。エドガー・アラン・ポーは、精神分析が生まれるより前に、小話を書いています。それは、*The Angel of the Odd*、変わりものの天使、という小話です。彼はこの変わりものの天使を語らせているのですが、それはひどいアクセントの英語・ドイツ語がでてくる話で、少しバル ザックが銀行家ニューシングンを語らせたようなスタイルとなっています。

それは無意識の予感みたいな、ちょっとした小話です。この *Odd*、英語の *Odd* は、*impair*（奇数、へま）、という意味であり、それは奇数の数が存在するときの奇数です。そして それはとてもうまく無意識を形容していて、ラカンはある箇所でそのことに注意を促していました。なぜなら無意識とは、いろいろへま *impair* をするものだからです。変 *bizarre* という語の周りに、辞書はセンセーショナルなリストを教えています。それらはすべて無意識やその現象、患者、分析家自身にも、適用することが可能です。私はこのリス

トが大好きですね。変というものから、辞書はアブラカタブラという呪文のようなものを唱えていますね。ふつうでない anormal、野蛮な baroque、不和の discorde、珍妙な cocasse、滑稽な comique、並外れた extraordinaire、軌道を逸した extravagant、空想的な fantaisiste、気まぐれな fantasque、空想上の fantastique、夢幻の fantasmagorieque、奇妙な funemburesque、異様で 滑稽な grotesque、突飛な insolite、おぞましい monstrueux、独創的な original、快い pleasant,—これは皮肉としてですね—滑稽な ridicule、突飛な saugrenue、風変わりな singulier、おもしろい marrant,—これは一般的なものですね。変な性格、のところを、見てみましょう。ぼおとした abruti、あり得ない impossible、きまぐれな capricieux、理解できない incomprehensible、平等ではない inégal、さらには、いかれた cinglé、一般的な populaire、幻覚にとらわれた halluciné—辞書はそう考えているのですね、私は良く知りませんが—、[略] 頭がおかしい loufoque、取りつかれた maniaque、変わり者である numéro, être en numéro、独創的である original、現象 phénomène、ピストル pistolet—おかしなピストルという表現がでています、変なやつ type zèbre。

以上のものすべては、じつを言うと、精神分析の空間そのものです。そのうえ、フロイトによると精神分析家に与えられたものとは—それを告白しなければなりません—それは、節度のない、規範への愛です。変わり者 olibrius、常軌を逸したおかしなピストル、精神分析が知っていたものの埋め合わせとして、フロイトのあと、彼らはひとつの道徳を、いえ、ひとつの精神分析的道徳を発達させました。最小限言いうこととしては、この道徳は文明の運動自体にさからうものだということで、正直いって反動的な道徳です。

たとえばフランスでは、68年にさからって、フェミニズムにさからって、ホモセクシャルにさからって、となつたでしょう。つまり、彼らは主張しました、ある種の人たちは、少し時代遅れであり、さらにこう証明したのです。精神分析の経験から出発して言うこととして、「無意識はノン、ノン、ノン、ノン、と、すべてにたいして言うのだ」と。あなたはマークするでしょう。無意識とは反動的だということです。それは間違いありません。そのうえ、そういう理由で、つねにラカンは、「無意識は、主（あるじ、主人）のディスクールと同じ構造をもつ」と語っていました。そしてまさに、精神分析のディスクールは、その裏面です。

よろしい。まさに精神分析の空間が、変の空間であるという理由により、精神分析ではその規則・掟が大きな位置を占めることになります。たとえば、もしひとが精神分析をするなら、セッションは規則的になされなければなりません。精神分析家については、やはりできるだけあまり動かない方が望ましいのです。そのうえ、エドガー・アラン・ポーの変わりものの天使は、翼を持っていません。それは翼のない天使です。あらゆる精神分析的実践を支配しているものとは、ひとつの規則であり、それが自由連想と呼ばれる規則です。その意味は、「変であることを怖れるな」、です。変を前にも、後ずさりせずに話すこと。まさに変なことにおいてこそ、こう言ってよければ、精神分析は迎え入れます。精神分析において、規則性が必要なのは、まさに変なものが浮かび上がるようにするためなのです。本當です。その規則の審級、規則性が表現されるといいのですが。なぜならまさにこの土台があってこそ、不規則なものが立ちのぼり、浮かび上がるからです。

そしてひとが話す時、精神分析家が同意するのはまさにこの変なものにたいして、です。しかももっとも有効な解釈とは、多くの場合、一種の失言とか、一種の大失敗とかです。本當のこととへまとを区別するのは、とても難しいのです。そしてひとはさらに変の概念に達することができます。なぜなら神経症の主体は、根源的に奇数、へまをするからです。それは神経症の主体が調和していない（対になつてない、奇数である）、という意味においてです。あるいはまたその主体はひとりぼっちにならないために、ひとりの仲間を探すかもしれません。しかしその仲間は良い人かはわかりませんが、とにかく、だからと言って、並外れて、対になつてない、普通外である、不適切であると感じるのを妨げはしません。